



中田 國太郎 選 投稿数16首

尊敬をする人誰と問はれれば亡き姑ですと我は迷わず
 (評) 日本の昔の家族制度の中では、嫁と姑は、水と油のごとく決して融和することのない存在であった。が、そのような中で作者の姑は、家族の絆の中核としてすばらしい理想的な姿が想像される。尊敬する人物として姑を「我は迷わず」と断言しているところに作者の強い信念が伺える。誠に希有な存在であった。天国に眠る姑に読んで聞かせたいいい歌である。結婚した子ども夫婦の幸福を中心にして姑はいかにあるべきかを考える時代であると思う。笠原作、母に対する慕情の心が哀切にひびく。安井作、曇みこむ表現に春を待つ心情がにじむ。

亡き母に逢ひたし庭にぼうたんの白く咲きたり面影ゆれて 皆野 笠原三江子
 芹はまだ露はまだかと子ども等は季節の移りを問うて来て居り 皆野 安井 光代
 眼の手術順調なりと友の声溜めおく広報意気込みて読むと 三沢 新井 民子
 退職の春に植えたる黄の牡丹十六年経て大株に咲く 三沢 真下 杏子
 人生はいろいろなれど平均の寿命のわれは農に勤しむ 皆野 新井 茂
 日毎増す若葉の薫り運ひくる風は優しく身をつつみ呉るる 三沢 新井 叶子
 さつま床を夜毎と荒す野鼠に智恵と勇気で対抗のわれ 皆野 金子善次郎
 萌え出づる若葉の輝き日々移り山動く如わが窓に映ゆ 金崎 山田 雅子
 ランドセルかけて行くよに前の道姫ちゃん桃ちゃん一年生に 皆野 吉岡 ヨシ
 拝殿で昼食すませ武甲山下る山道話しはつきぬ 三沢 横田 龍雲
 おちこちに甞る連山春の朝鷲一羽が飛び去りゆきぬ 上日野沢 四方田利男
 巢作りの夫婦燕が寄り添って引込線で何かを喋る 野巻 町田 忠次

引間 豊作 選 投稿数25句

電線に雨のしずくや燕来る 下日野沢 引間富美子
 (評) 省略のよく利いた表現で、余分な情景は一切盛り込まず、簡潔な構成に何とも言えない魅力を感じる。遠く南洋より繁殖の為に日本列島に辿り着く。ちよど走り梅雨の頃、小雨の中を電線に雨雲が粒をなして輝き、それに燕が列をなして羽根を休めている。未だ子育てをしていない時期には、あまり巢に寄りつかず、他の鳥のように木の枝に止まることなく、代掻きを終えた田圃から土を啄み、巢の修復に懸命で、時折電線に仲間達と列になつて、「ヒチヒチ」何か話合っている様子は、天気のよい日も雨の日も情緒が深い。

盛りあがる山面に藤の咲きそめぬ 三沢 真下 杏子 皆野 植竹美恵子
 草むしり昨夜の雨のありがたき
 隣より子供の声や若葉風 下日野沢 佐藤 清子 佐保姫に何時か出会の夢にでも
 池の鯉イルカのように春に飛ぶ 下日野沢 根岸 進
 理髪店みどりの風を映しけり 下田野 藤田 稔 金崎 浅見富美子
 鳴りや子は軽やかにピアノ弾く
 巢つばめの腹一杯の機嫌かな 下田野 藤田 稔 皆野 大沼シヅ子
 岩つゝじ見とれつ深山の湯に遊ぶ 金崎 設楽 武子 皆野 大沼シヅ子
 侘び住みの兄に文書く暮の春 三沢 新井 叶子
 山の日に銜う楓の新樹かな 三沢 長谷河ソノ 薄絹を延べる波間に春の風 国神 松岡 千恵

俳句・短歌を募集
 作品には、ふりがなをつけ、住所・氏名を明記して
 企画課へお寄せください。
 1人1句、1首に限ります。
 8日必着